平成 30 年度

教育研究員研究報告書

幼　稚　園

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

Ⅱ　研究の視点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２

Ⅲ　研究仮説　・・・　２

Ⅳ　研究方法　・・・　２

Ⅴ　研究内容　・・・　２

Ⅵ　検証保育１（４歳児）研究内容の検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10

Ⅶ　検証保育２（４歳児）研究内容を活用した保育改善の検証・・・　14

Ⅷ　事例（５歳児）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22

Ⅸ　研究の成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24

Ⅹ　今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24

研究主題

自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶ幼児の育成
～興味や関心に基づく援助を通して～

Ⅰ　研究主題設定の理由

１　幼児期の教育における遊びの重要性

平成 30 年４月から全面実施となった幼稚園教育要領では、従前の幼稚園教育要領（平成 20 年）と同様、幼稚園教育は幼児期の特性を踏まえ環境を通して行うことが明記されている。これは、幼児期が「自発的・主体的に環境と関わりながら直接的・具体的な体験を通して、幼児の生きる力の基礎が培われる時期」[1]であることに基づいている。

自発的・主体的に環境と関わる活動は、園生活の様々な場面で想定されるが、その大部分を占めるのが遊びである。自発的な活動としての遊びにおいて、幼児は身近な環境に関わり、心身全体を働かせ、様々な体験をすることを通して、発達の基礎を築いていく。各幼稚園においては、遊びを通して幼児が直接的・具体的な体験を積み重ねていくことが重視されている。

２　遊びにおいて幼児の興味や関心を的確に捉えることの重要性

自発的な遊びは、身近な環境にあるものや人、事柄への興味や関心が芽生えるところから始まる。そして、興味や関心が持続したり高まったりする中で、幼児は自分の思いや考えをもって遊びに取り組んでいく。遊びに取り組む中で「興味や関心は次々と変化し、あるいは深まり、発展していく」[2]ことから、私たち保育者が適切な援助をするためには、幼児の興味や関心を的確に捉えた上で、ねらいに沿って援助を選択することが重要になってくる。

３　幼児の実態と課題

「幼児は、興味や関心をもったものに対して自分から関わろうとする」[3]とされるように、実際の園生活においては、幼児が様々なものや人、事柄などに興味や関心をもち、自分から関わって遊ぼうとする姿が多く見られる。このように、遊び始めの姿からは、興味や関心をもった対象に、幼児が自発的に関わろうとする力をもっていることが分かる。

しかし、幼児の中には、興味や関心が薄く自分で遊びを進めることが難しい幼児や、自分の思いや考えを表現することに消極的な幼児もおり、自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶという面では課題があると考えた。

これらのことを踏まえ、研究主題を「自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶ幼児の育成～興味や関心に基づく援助を通して～」と設定した。

---

[1] 幼稚園教育要領解説（文部科学省　平成 30 年３月）p. 142
[2] 同上　p. 43
[3] 同上　p. 14

Ⅱ　研究の視点

・　主体的な遊びの展開における幼児の興味や関心の変容を可視化し、「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」を明らかにする。

・　幼児の興味や関心を的確に捉え、「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」を踏まえて、適切な援助を行う。

Ⅲ　研究仮説

幼児の興味や関心を的確に捉え、「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」を踏まえて、適切な援助を行うことで、自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶ幼児が育つだろう。

Ⅳ　研究方法

１　基礎研究及び事例研究

・　基礎研究及び事例研究を通して、自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶ幼児の姿を捉え目指す幼児像を明確にする。

・　事例研究を通して、「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」を明らかにする。

・　事例研究を通して、幼児の興味や関心を的確に捉えるための視点を明らかにする。

・　目指す幼児像に迫るために、「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」の中でどのような援助が必要かを探る。

２　検証保育

・　基礎研究と事例研究において捉えた視点と援助を基に、検証保育を行う。

Ⅴ　研究内容

１　目指す幼児像

幼児期の教育における自発的な活動としての遊びの重要性について、幼稚園教育要領解説序章 第２節３ 幼稚園の役割[4] の中に以下のような記述がある。　（下線は本研究による。）

> 幼稚園では、幼児の自発的な活動としての遊びを十分に確保することが何よりも必要である。それは、遊びにおいて幼児の主体的な力が発揮され、生きる力の基礎ともいうべき生きる喜びを味わうことが大切だからである。幼児は遊びの中で能動的に対象に関わり、自己を表出する。そこから、外の世界に対する好奇心が育まれ、探索し、物事について思考し、知識を蓄えるための基礎が形成される。また、ものや人との関わりにおける自己表出を通して自我を形成するとともに、自分を取り巻く社会への感覚を養う。このようなことが幼稚園教育の広い意味での役割ということができる。

この記述を踏まえた上で、事例を検討し、課題となる幼児の姿を次のように確認した。

[4] 幼稚園教育要領解説（文部科学省　平成 30 年３月）p. 20

課題となる幼児の姿

- 興味や関心をもって遊び始めるが、遊びが持続しない。
- 興味や関心があっても、どのように関わったらよいか分からず、動き出せずにいる。
- 友達や保育者の言動が気になり、自分の思いや考えを表して遊ぶことができない。

さらに、課題となる幼児の姿を、前ページの下線に示した記述のうち、「能動的に対象に関わる」、「物事について思考する」、「ものや人との関わりにおいて自己を表出する」という点から検討し、主体性をもって遊ぶために幼児に経験してほしいことを次のように共通理解した。

主体性をもって遊ぶために幼児に経験してほしいこと。

- 興味や関心をもった対象に、自分から関わる。
- より楽しくしたいという思いや考えをもち、遊びに関わる。
- 遊びの中で起きている現象や状況を受け止める。
- 繰り返し取り組んだり、試したりする。
- 自分の思いや考えを保育者や友達に言動で表して伝えようとする。

そして、このような経験を積み重ねていく姿を、目指す幼児像として次のように捉えた。

「目指す幼児像」

遊びをより楽しくしたいという自分の思いや考えをもち、

自己表現しながら主体的に遊ぶ幼児

2　本研究における「興味や関心」

幼稚園教育要領解説には、興味や関心について、以下のような記述がある。

- 幼児は、興味や関心をもったものに対して自分から関わろうとする。[5]
- 幼児は一人一人興味や関心を向けるものが異なる。[6]
- 幼児は、（中略）環境に関わって、 興味や関心を抱きながら様々な活動を生み出していく。[7]
- 幼児は、幼稚園生活の中で様々な環境に触れ、興味や関心をもって関わり、いろいろな遊びを生み出す。[8]

これらの記述を踏まえ、本研究における「興味や関心」の定義を「環境にあるものや人、事柄に対して自ら関わりたいという幼児の思い」とした。

[5] 幼稚園教育要領解説（文部科学省　平成 30 年３月）p. 14
[6] 同上　p. 41
[7] 同上　p. 103
[8] 同上　p. 171

３　幼児の興味や関心の的確な捉え

前述のとおり、遊びの中で、幼児の「興味や関心は次々と変化し、あるいは深まり、発展していく」[9]ものである。保育者が適切な援助をしていくためには、変化したり深まったり発展したりする興味や関心を的確に捉え、遊びがどのような状態にあるのかを理解することが大切になってくる。そこで、幼児が遊ぶ姿を記録にとり、事例１のように、「興味や関心」、「遊びの持続・変容に関わる要因」について分析をした。

事例１「４歳児５月事例　ロケットごっこ」

幼児及び保育者の言動	分析　＜分析の対象：Ａ児＞	
	興味や関心	遊びの持続・変容に関わる要因
Ａ児）　「ロケットを作ろう。」と言い、Ｂ児とＣ児が遊んでいる場のそばに中型積み木を運ぶ。 　積み木置き場と遊び場を行き来しながら中型積み木をいくつか運び、ロケットを作る。	○ロケットというイメージをもち、中型積み木で場を作ること。 ○友達のそばで遊ぶこと。	
興味や関心の持続		・十分な数の積み木がある（環境にあるもの）。
興味や関心の高まり		・遊びの場ができてきた（満足感）。 ・声、視線の届くところに保育者がいた（身近な人の言動）。
Ａ児）「先生。ロケットに乗りに来て。」と言う。 保育者）「分かった。先生は宇宙まで行ける飛行機を作ろうかな。」と中型積み木で飛行機を作り始める。	○作った遊びの場で保育者と関わること。	
興味や関心の高まり		・保育者がそばで遊び始めた（身近な人の言動）。 ・暑いというイメージから、扇風機があるとよいと考えた（必要感）。
Ａ児）　近くにあった中型積み木を保育者に渡し、「先生これ扇風機ね。飛行機は太陽の近くまで飛ぶから、暑いでしょ。」と言う。 保育者）「なるほど、暑くなって運転ができなくなったら大変だものね。」と言って中型積み木を受け取り、場を作る。「よし、運転しよう。」と運転する動きをする。 Ａ児）　ロケットの中から保育者を見ている。	○扇風機や太陽などを想像して遊ぶこと。 ○作った場で保育者と遊ぶこと。	
興味や関心の更なる持続		・保育者がそばで遊んでいる（身近な人の言動）。
Ｂ児）「あ、流れ星が見える。」と上を指さして言う。 保育者）「本当だ。きれいだね。宇宙まで来て良かった。」		
興味や関心の更なる高まり		・Ｂ児と保育者のやり取りを聞いた（身近な人の言動）。
Ａ児）「宇宙まで来たから、隕石に気を付けて。」と言う。	○宇宙という想像の世界で保育者や友達とやり取りすること。	

事例１の分析から、遊びの持続・変容に関わる要因として、満足感や必要感など「幼児の内面的な要因」と、環境にあるものや身近な人の言動など「環境等の外面的な要因」があることが分かった。本研究では、「遊びの持続・変容に関わる要因」を視点として幼児の遊ぶ姿を観察することで、興味や関心を的確に捉えることができると考えた。

[9] 幼稚園教育要領解説（文部科学省　平成 30 年３月）　p. 43

そこで、更に複数の事例の分析、考察を行ったところ、「遊びの持続・変容に関わる要因」として、「幼児の内面的な要因」「環境等の外面的な要因」に加えて、「今までの体験とのつながり」も関連していることが分かった。この分析、考察をまとめたものが、表１「遊びの持続・変容に関わる要因」である。

表１「遊びの持続・変容に関わる要因」

表１-(1) 幼児の内面的な要因

要　因	例
満足感	自分の思いや考えが実現できた。 （例）「作りたいものが出来上がった。」、「関わりたい対象に十分関わった。」など
必要感	自分の思いや考えを実現したい。 （例）「〇〇が作りたい。」、「〇〇を使いたい。」など
困り感	自分の思いや考えを実現できない。自分の思いや考えを伝えられない。 （例）「〇〇がほしいけれど数が足りない。」、「〇〇を作りたいけれど自分の力では実現できない。」、「友達に自分の思いを伝えることができない。」など

表１－(2) 環境等の外面的な要因

要　因	例
身近な人の言動	保育者、一緒に遊ぶ友達、そばで遊ぶ友達など
環境にあるもの	ものの量、ものとの距離、ものの動き、ものとの関係(扱いに慣れている、初めて触れるなど)など

表１－(3) 今までの体験とのつながり

要　因	例
成功体験	今までの遊びや生活の中で、うまくいった体験 （例）「〇〇を使ってうまくいった。」、「取り組んだことがあって自信がある。」など
失敗体験	今までの遊びや生活の中で、うまくいかなかった体験 （例）「〇〇を使ったらうまくいかなかった。」、「失敗したことがあり苦手である。」など
印象的な体験	今までの遊びや生活の中で、「楽しい」、「面白い」、「怖い」など印象が強かった体験 （例）遠足や行事などの体験、家庭での体験　など

本研究では、表１に示した「遊びの持続・変容に関わる要因」を幼児の遊ぶ姿を観察する際の視点とし、幼児の興味や関心を的確に捉えることにより、遊びの実態を把握することに加え、その後の展開をより具体的に予想することができると考えた。

目指す幼児像に迫るためには、遊びの展開が幼児の主体的な活動となっていくことが重要である。そこで、事例研究を通して、主体的な遊びがどのように展開されていくのかについて、分析、考察を行った。

4　興味や関心に基づく主体的な遊びの過程

幼児が主体的に遊んでいる場面の事例を分析、考察し、その様子を可視化して図に表したものが、図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」である。

幼児の遊びは、一人一人の興味や関心に基づいて、矢印の方向に進んでいく。矢印の方向に進む過程の中で、興味や関心が薄れたり、課題を乗り越えられなかったりすると、遊びが停滞した状態になることがあるが、保育者が適切な援助をすることにより、主体的な遊びが展開される。

なお、矢印の方向に向かって、停滞することなく遊びが展開されているときも、ねらいに基づき幼児が必要な体験を得ることができるような援助をしていくことが重要である。

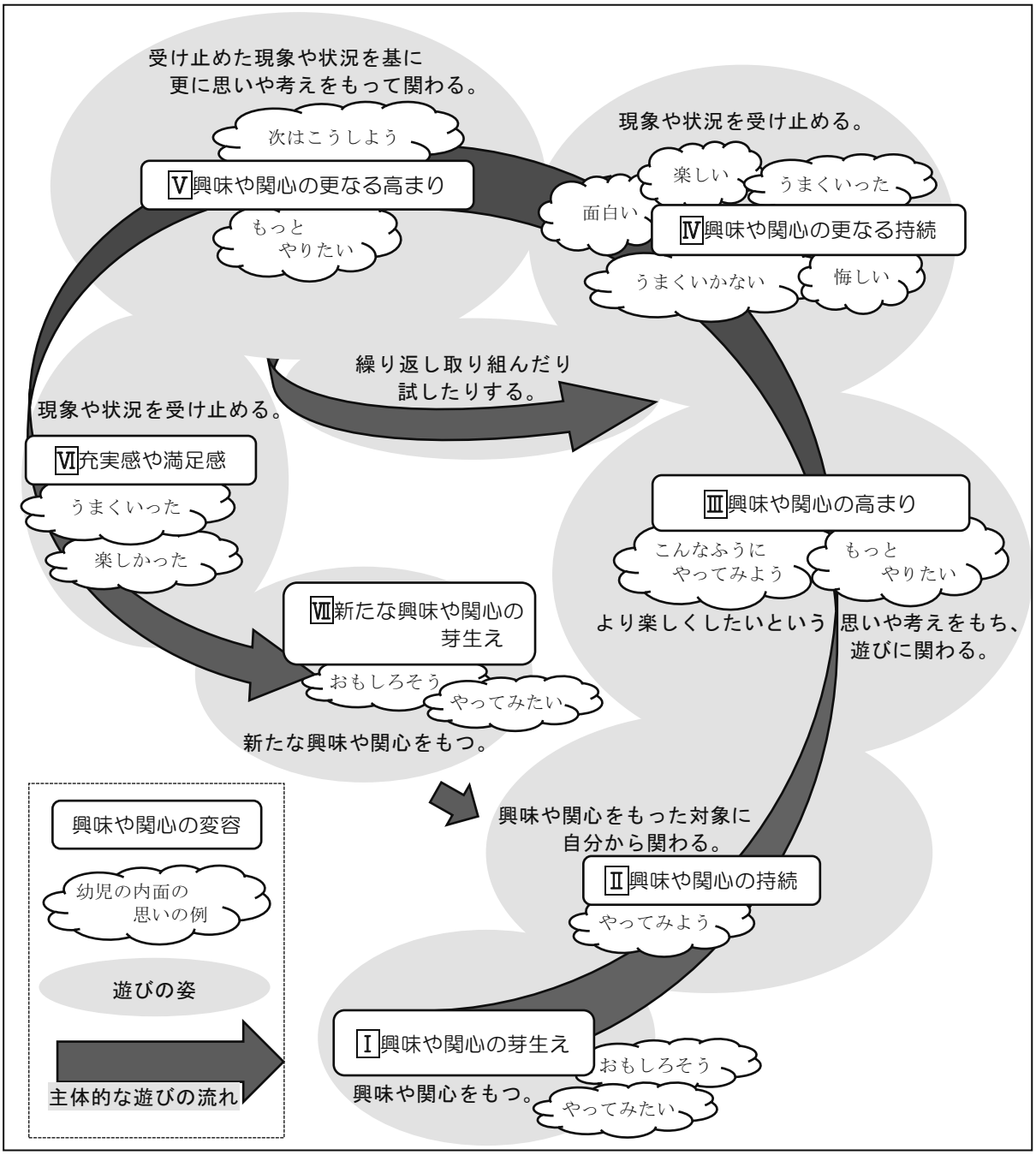


図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」

5　幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助

目指す幼児像に迫るために、保育者は、まず、幼児の興味や関心を的確に捉え、遊びがどのような状態にあるのかを把握し、それに基づいて適切な援助をすることが求められる。求められる援助は、遊びの状態によって異なってくる。そこで、本研究では、図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」に示したⅠからⅦのそれぞれの過程において遊びの状態が異なることを踏まえ、ⅠからⅦの過程ごとに、必要な援助を整理し、表２にまとめた。

なお、事例検討を踏まえ、保育者の援助は見守る、受け止める、認める、引き出す、気付かせる、確認する、提示する、手助けするに分類することとし、その援助の具体例を挙げた。

また、遊びの実態をより詳しく把握するために、

◎　思いや考えをもち自分の力で遊びを進めている状態
◇　遊びが停滞している状態
☆　遊びを支える必要がある状態

に分類し、援助を選択する際の指標とした。

表２「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」

興味や関心に基づく主体的な遊びの過程 幼児の内面の思いの例	保育者の援助 遊びの状態　◎：思いや考えをもち自分の力で遊びを進めている ◇：遊びが停滞している ☆：遊びを支える必要がある
おもしろそう やってみたい 興味や関心をもつ。 Ⅰ興味や関心の芽生え	◎見守る ・　表１を基に、幼児の興味や関心を的確に捉える（以下全ての過程において共通）。 ・　幼児が自分から行動し、関わるまでの時間を保障する。 ◎認める ・　興味や関心をもっていることを受け止め、言葉で表したり、視線を送ったりする。 ◇引き出す ・　思いや考えが明確になっていくように、幼児とのやり取りを通して、思いや考えを引き出す。 ☆提示する ・　興味や関心の対象に関わるきっかけとなる言葉を掛けたり、場やものを示したりする。 ☆手助けする ・　興味や関心の対象に関わることができるように、周囲の幼児との仲立ちをしたり、保育者も一緒に遊んだりする。
やってみよう 興味や関心をもった対象に自分から関わる。 Ⅱ興味や関心の持続	◎受け止める ・　幼児の行動や目的を表情や言葉で肯定的に受け止める。 ◎認める ・　遊びへの意欲が高まるように、自分から取り組む姿を認める。 ・　自分の思いや考えを表したり、実現しようとしたりする様子を認める。 ◇引き出す ・　思いや考えがより具体的になるように、幼児とのやり取りを通して、思いや考えを引き出す。 ◇確認する ・　自分（たち）のしたい遊びを意識できるように、遊びのルールや役割、状況、目的などを確認する。

こんなふうに やってみよう もっと やりたい	☆提示する ・　遊びの展開につながるような動きやものを提示する。 ・　保育者がモデルとなり実際に動いてみたり、ものを使ってみせたりする。 ☆手助けする ・　その遊びならではの楽しさを味わえるように、幼児の思いや考えに合わせて、必要な手助けをする。
より楽しくしたいという思いや考えをもち、遊びに関わる。 Ⅲ興味や関心の高まり 面白い　うまくいった 楽しい　悔しい うまくいかない	◎見守る ・　遊びの展開に伴う幼児の気付き、思い付き、試しなどを見守る。 ◎認める ・　遊びの展開に伴う幼児の気付き、思い付き、試しなどを、言葉に表して認める。 ◇確認する ・　幼児のしていることや実現したい思いや考え、一緒に遊ぶ友達の存在などの遊びの状況を言葉で表して、意識付ける。 ☆提示する ・　思いや考えの実現に必要なものを一緒に考えて用意したり、提案したりする。 ・　今までの経験を思い出せるような言葉を掛ける。 ・　見通しをもったり見比べたりできるような見本や方法を示す。 ・　保育者がモデルとなって動きを示す。 ☆手助けする ・　幼児の思いや考えを踏まえた上で、遊びに必要なことを一緒に考えたり、幼児だけで困難なことを手伝ったりする。
現象や状況を受け止める。 Ⅳ興味や関心の 更なる持続 次はこうしよう もっと やりたい	◎見守る ・　思いや考えを実現していこうとする姿を見守る。 ・　困難や課題を自分（たち）で解決しようとする姿を見守る。 ◎認める ・　幼児が自分から取り組んだことや自分で気付いたことを言葉で表して認める。 ◎受け止める ・　思いや考えが実現していく喜びや嬉しさを受け止める。 ・　取り組んだことや気付いたこと、分かったことを言葉や表情に出して受け止める。 ◇引き出す ・　次の遊びの展開につながるような思いや考えを引き出す。 ◇気付かせる ・　友達の言動や周囲の状況に気付くことができるような言葉を掛ける。 ・　今まで経験したことの中で、今取り組んでいる遊びに取り入れるとよいことに気が付くことができるように、言葉を掛ける。 ・　疑問をもったり、発想の転換を図ったりできるように、問い掛ける。 ☆提示する ・　困難や課題を乗り越えるためのヒントになるものや、遊びのイメージが広がるようなものを示す。 ☆手助けする ・　保育者が一緒に遊び、遊びの場の作り方や使い方、遊びにあるとよいものなどを幼児とともに考えたり用意したりする。

受け止めた現象や状況を基に更に思いや考えをもって関わる。 Ⅴ興味や関心の更なる高まり	◎認める ・　幼児が自ら考えて取り組んでいることや、実現しようとしていることを肯定的な表情や言葉で認める。 ◇気付かせる ・　新たな方法やより良い方法に気付くことができるように、疑問を投げ掛けたり、発想の転換を図ることができるように問い掛けたりする。 ☆手助けする ・　必要な場やものを一緒に考えたり、思いや考えの実現につながるような遊び方を知らせたりする。
繰り返し取り組んだり試したりする。 Ⅳ Ⅴ うまくいった 楽しかった	（※　繰り返す場合の援助はⅣ、Ⅴも参照する。） （※　この過程を通らずに次のⅥに進むこともある。） ◎見守る ・　繰り返し取り組んだり試したりする姿を見守る。 ◎認める ・　幼児が繰り返し取り組んだり試したりしている姿やその意欲を認める。 ◇気付かせる ・　幼児が遊びの状況を受け止めることができるように、ものや人の動き、現象などを言葉で表す。 ☆手助けする ・　困難や課題を乗り越えるために、ヒントになることを知らせたり、一緒に取り組んだりする。
現象や状況を受け止める。 Ⅵ充実感や満足感 おもしろそう やってみたい	◎認める ・　思いや考えが実現したことや、実現につながった気付きや取組を認める。 ・　自分（たち）の力で取り組んだことやその過程を幼児と一緒に振り返り、認める。 ◎受け止める ・　充実感や満足感が高まるように、思いや考えが実現した喜びを受け止める。 ◇引き出す ・　新たな興味や関心をもち、次の遊びに取り組んでいくことができるように、幼児とのやり取りの中で、思いや考えを引き出す。
新たな興味や関心をもつ。 Ⅶ新たな興味や関心の芽生え	※　幼児の興味や関心に応じて環境を再構成し、Ⅰから Ⅱの援助を行う。

なお、遊びの実態を把握するために、Ⅰから Ⅶの全ての過程において、表１「遊びの持続・変容に関わる要因」を視点として幼児の興味や関心を的確に捉えることが大切である。

Ⅵ　検証保育１（４歳児）　研究内容の検証

表１「遊びの持続・変容に関わる要因」の視点の妥当性と、図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」の有効性を検証するために、検証保育を行った。

１　研究内容（表１、図１）の検証方法

検証保育１は２年保育４歳児９月上旬に実施した。実施方法は以下のとおりである。

(1)　遊びに取り組む幼児の言動と保育者の関わりを記録する（２名の幼児を観察対象児として、複数の事例を検討する）。

(2)　記録を、図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」に当てはめ（分析①）、遊びの過程が進んでいくときの幼児の興味や関心を表１「遊びの持続・変容に関わる要因」を視点として分析する（分析②）。

(3)　幼児が思いや考えをもち主体的に遊ぶ姿につながったと考えられる保育者の援助(下線)について考察する。

２　Ｃ児事例　『一本橋できた』

(1)　記録及び分析

分析① 興味や関心に基づく主体的な遊びの過程 ＜図１より＞	記　録 （　保育者の援助　）	分析② ○興味や関心 遊びの持続・変容に関わる要因＜表１より＞
Ⅰ興味や関心の芽生え	Ｃ児が園庭で泣いている。周りには、一本橋を作ることができるジョイント式の遊具が散らばっている。 保育者はＣ児のそばに行き、Ｃ児を膝に抱きかかえる。保育者がＣ児に「(遊具を) 全部使って作りたかったのかな。」と言うと、Ｃ児はうなずく。 Ｄ児とＥ児がやってきて、散らばっていた遊具で遊び始める。保育者は、遊び始めた二人にＣ児の思いを伝える。Ｄ児が「Ｃくん、後でぼくたちに貸してね。」と言い、Ｄ児とＥ児は別の遊びに移る。	環境にあるもの 困り感 ○遊具を全部使って遊ぶこと。 身近な人の言動（保育者の援助）
Ⅱ興味や関心の持続 	Ｃ児は泣くのをやめて、Ｄ児とＥ児の様子を目で追う。保育者は場から離れ、見守る。 周りに誰もいなくなると、Ｃ児は遊具を組み合わせて一本橋を作り始める。 10 個ほどつなげて橋らしい形になったところで、笑顔で「うー。」と言う。	○遊具を全部使って橋を作ること。 環境にあるもの 満足感
Ⅲ興味や関心の高まり	橋を渡り始める。	○作った橋で遊ぶこと。
Ⅳ興味や関心の更なる持続	繰り返しながら何度も一本橋を渡る。	

Ⅴ興味や関心の更なる高まり	何度か一本橋を渡って遊んだ後、固定遊具の上にいたＦ児に「ねぇ、これできる？」と話し掛ける。Ｆ児は「できるよ。」と言い、固定遊具から降りてきてＣ児の後について一本橋を渡り始める。 Ｃ児とＦ児が遊んでいると、向かい側からＧ児がやってきて一本橋を渡り始める。Ｃ児は「（スタート地点は）そっちじゃないよ。」と言う。Ｇ児は降りて、Ｃ児、Ｆ児と同じ方向から渡り始める。	身近な人の言動（Ｆ児の言動） ○友達と一緒に一本橋で遊ぶこと。 身近な人の言動（Ｇ児の言動） ○一本橋の渡り方を決めて、友達と一緒に遊ぶこと。

(2)　考察

＜図１、表１の検証に関する考察＞

・　事例を図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」に当てはめ、遊びの過程が進んでいくときのＣ児の興味や関心を表１「遊びの持続・変容に関わる要因」に合わせて分析したところ、身近な人の言動により遊びが持続したり変容したりする様子が多く見られた。自分の力で橋を作ったという満足感も、次の過程に遊びが進んでいくときの要因となっている。

・　遊び出しの場面では、思い通りに遊具を扱うことができずに困り感をもっている。この場面で、保育者の援助がなければ、遊びの展開は異なっていたと予想される。この事例では、保育者がＣ児の困り感を受け止め、興味や関心をもったことに継続的に取り組むことができるように援助をしている。このことにより、Ｃ児の遊びは図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」のⅠからⅡへ進み、その後の展開も保障されたと考えられる。

＜保育者の援助に関する考察＞　※　囲みの援助は、表２「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」と対応している。

・　Ⅰの過程で、Ｃ児は“遊具を全部使って遊びたい”という思いをもっているが、実現することができておらず、泣いて思いを表している。保育者はＣ児の思いを受け止めつつ、「（遊具を）全部使って作りたかったのかな。」という言葉を掛け、Ｃ児の思いが明確になるような働き掛け（◇引き出す）をしている。また、遊具を使って遊ぼうとしたＤ児とＥ児に、Ｃ児の思いを代弁する援助（☆手助けする）をしている。これらの援助により、Ｃ児の興味や関心が持続し、Ⅱの過程に進んだと考えられる。Ⅱの過程以降、Ｃ児の興味や関心は、“遊具を使う”、“橋を作る”、“橋を渡る”、“友達と遊ぶ”と、遊びの展開に伴って変わってきている。その様子からは、Ｃ児が思いや考えをもち、自分の力で遊びに取り組んでいる様子が分かる。

３　Ｈ児事例　『線路を作ろう』

（1）　記録及び分析

分析① 興味や関心に基づく主体的な遊びの過程 ＜図１より＞	記　録 （　保育者の援助　）	分析② ○興味や関心 遊びの持続・変容に関わる要因＜表１より＞
Ⅰ興味や関心の芽生え	かけっこをして遊んでいたＨ児は、水飲み場で水を飲んだ後、砂場にいた保育者のそばに行き「あそぼっと。」とつぶやく。砂場では他にも５名ほどの幼児が遊んでいる。保育者は「Ｈくんも来たのね。」と声を掛ける。 Ｈ児は砂場のそばに置いてある遊具の籠の中から、ブルドーザーの遊具を手に取る。	身近な人の言動 環境にあるもの ○保育者のいる砂場で遊ぶこと。 ○砂場でブルドーザーの遊具を使って遊ぶこと。
Ⅱ興味や関心の持続	Ｈ児はブルドーザーの遊具を手に取り、遊び始める。 そばにいたＩ児に「ね。Ｉくん。これはなんのためにあると思う？」と、尋ねる。Ｉ児は、「走るため。」と答える。Ｈ児は「ブブー。正解は平らにするためでした。」と言って、砂を平らにならすようにブルドーザーの遊具を動かす。保育者はその姿をそばで見守る。 Ｈ児の遊んでいた周辺の砂が平らになる。	成功体験 （今までの砂場遊びの経験） ○ブルドーザーの遊具を使って、砂を平らにすること。 満足感
Ⅲ興味や関心の高まり	Ｈ児は、砂場用の遊具の籠の中から新幹線の遊具を持ってきて、ブルドーザーの遊具で平らにした場所を「ドコドコドコ。キーン。ガシン。」などとつぶやきながら走らせる。 「遅れています。大宮、大宮。御乗車、ありがとうございます。」「発車します。通過します。」など、アナウンスをまねて言葉を言いながら、新幹線の遊具を走らせる動きをする。Ｈ児は「新幹線です。」と言いながら、新幹線を動かす。	環境にあるもの 印象的な体験 ○新幹線の遊具を走らせること。 ○自分の知っているイメージを再現すること。
Ⅳ興味や関心の更なる持続－(1)	途中、Ｈ児が新幹線を動かすのをやめたときに、保育者が「そこが車庫だったのね。」とＨ児に言う。Ｈ児は嬉しそうな表情をし、新幹線を車庫から出して動かしながら、保育者のそばで新幹線を走らせる。	
Ⅴ興味や関心の更なる高まり－(1)	遊具を動かした場所には線路のように跡ができている。保育者が「車庫から線路を作ってみたら。」とＨ児に言う。Ｈ児は、新幹線の遊具を置き、今度はブルドーザーの遊具を手に持ち、砂を掘るように跡を付けて線路を作る。	身近な人の言動 （保育者の援助） 環境にあるもの ○砂に跡を付けて線路を作ること。
Ⅳ興味や関心の更なる持続－(2)	保育者が「工事中のブルドーザーが来た。」とＨ児に言う。Ｈ児は嬉しそうな表情で、ブルドーザーの遊具を使い、線路を伸ばしていく。	身近な人の言動 （保育者の援助）
Ⅴ興味や関心の更なる高まり－(2)	Ｈ児は「あれ。（道が）違う方向に行っている。嫌だな。」と言い、手で砂を掘り始める。 保育者は「Ｈくんが道路工事をしている。ブルドーザーより深く掘れるのね。」と言う。Ｈ児は嬉しそうな表情をした後、黙々と砂を掘り線路を作る。	成功体験 （今までの砂場遊びの経験） ○手で砂を掘って線路を作ること。

(2)　考察

＜図１、表１の検証に関する考察＞

・　遊び出しの場面では、H児は“砂を平らにならすこと”を楽しんでいたが、その遊びに満足したことにより、“新幹線を走らせること”に興味や関心が向かっている（Ⅲ）。この場面では、満足感（表１－(1)）、身近な人の言動（表１－(2)）、印象的な体験（表１－(3)）など、複数の要因が遊びの持続・変容に影響していることが分かる。

・　線路の作り方は、ブルドーザーの遊具を使って跡を付ける方法から、手で掘る方法に変化している（Ⅴ－(2)）。“線路を作る”という一つのめあてを軸として、様々な思いや考えをもって遊びに取り組む様子が分かる。

＜保育者の援助に関する考察＞　※　囲みの援助は、表２「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」と対応している。

・　保育者はⅠからⅡの過程で、“保育者のそばで遊びたい”というH児の思いを捉え、H児の思いを受け止めて関わっている（◎認める、◎見守る）。このことにより、H児はその後の遊びに安心して取り組むことができたと考えられる。

・　保育者の「そこが車庫だったのね。」（◎受け止める）、「車庫から線路を作ってみたら。」（◇気付かせる）、「工事中のブルドーザーが来た。」（◎認める）などの言葉が、H児の遊び方に大きな影響を与えていることが分かる。保育者は遊びの流れや幼児に経験させたいことを踏まえ、丁寧に言葉を選んでいくことが求められる。

４　研究内容（表１、図１）の検証のまとめ

(1)　表１「遊びの持続・変容に関わる要因」の検証

２名の対象児の記録の分析、考察からは、遊びの持続・変容には、表１で示した様々な要因が関わっていることが分かった。特に、前ページの分析②からは、表１－(2)の環境等の外的な要因（身近な人の言動、環境にあるもの）の影響が大きいことが明らかになった。これは、表１－(1)幼児の内面的な要因と表１－(3)今までの体験とのつながりに比べて、現象として捉えられる事柄であることが関係していると考えられる。

現象として捉えにくい事柄（表１－(1)幼児の内面的な要因、表１－(3)今までの体験とのつながり）も意識していくことで、幼児の興味や関心をより的確に捉えることができるようになるのではないかと考える。

(2)　図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」の検証

幼児の興味や関心に着目し、幼児の遊ぶ姿を図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」に当てはめて捉えることにより、対象児の遊びの実態を具体的に把握することができることを実証することができた。また、２名の対象児ともに、保育者の援助を受けながら遊ぶ様子から、ⅠからⅤまでの過程を記録、分析、考察することができた。

今回の検証保育では記録、分析、考察ができなかったⅥ以降の過程の検証を進めると同時に、４歳児だけでなく、３歳児、５歳児でも検証をするという課題が残っている。

Ⅶ　検証保育２（４歳児）　研究内容を活用した保育改善の検証

検証保育１では、対象児が保育者の援助を受けたり周囲の友達や環境からの影響を受けたりしながら、主体的に遊びを展開する様子を分析、考察することができた。このことは、主体的な遊びを支えていくものとして、適切な保育者の援助や、周囲の友達や環境からの影響が不可欠であることを表している。

そこで、検証保育２では、表２「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」を活用した指導案を作成し、保育改善に取り組んだ。

１　表２「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」の活用に関する検証方法

検証保育２は２年保育４歳児９月上旬から10月下旬に実施した。実施方法は以下のとおりである。

(1)　目指す幼児像から実態を捉えたときに課題となる姿が見られた幼児を対象児とし、言動と保育者の関わりを記録する（２名の幼児を観察対象児として、複数の事例を検討する）。

(2)　(1)で捉えた課題から、保育者の願いと援助の方向性を明らかにし、表２「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」を参照して指導案を作成する。

(3)　検証保育①と同様に分析、考察を行い、対象児の傾向を把握し、翌日以降の援助の方向性を定める。

(4)　(3)を踏まえて保育改善に取り組む。

また、表２「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」の有効性を検証するため、

○　翌日に向けての保育者の援助の改善に関する検証保育（Ｊ児事例）

○　２か月間の保育者の援助の積み重ねによる対象児の変容を捉える検証保育（Ｌ児事例）

の２事例の検証を行った。

２　翌日に向けての保育者の援助の改善に関する検証保育（Ｊ児事例）

２年保育４歳児９月中旬

(1)　Ｊ児の実態

・　他児が遊んでいる場に「入れて」と言って入り、遊び始める姿が多い。遊び始めた後も、別の幼児がしている遊びに気が向きやすく、遊びを転々とすることがあり、一つの遊びの持続時間は短い。
・　スカートや抱っこ紐を身に着けてお母さんやお姉さんになるなど、役になって動くことを好む。
・　友達の作っているものを見て影響を受け、“自分も作ってみたい”という気持ちをもち、作り始めることも多い。作ったことに満足し、作ったものを使って遊ぶことは少ない。

(2)　保育者の願いと図１を踏まえた援助の方向性

＜保育者の願い＞
・　興味や関心をもって取り組み始めた遊びを、十分に楽しんでほしい。
・　役になりきって動いたり、友達の作品をまねて作ったりするなど、遊びの中で自分のしたいことを見付け、主体的に遊びに関わってほしい。

＜図１を踏まえた援助の方向性＞
・　Ⅰ興味や関心の芽生えからⅡ興味や関心の持続に向かう姿を予想し、展開に応じた援助を想定する。
・　Ⅲ興味や関心の高まりの過程で、表１を参考に本児の楽しんでいることを的確に捉え、援助を選択する。

(3)　本時のねらい

○　自分のしたい遊びを見付け、その遊びを十分に楽しむ。
○　遊びに必要なものや場を作ったり、作ったものや場で遊んだりすることを楽しむ。

(4)　指導案（抜粋）

予想されるＪ児の姿	友達の影響を受け、見たり、まねたりしながら、作りたいものを作る。	
興味や関心に基づく主体的な遊びの過程<図１より>	幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助<表２より>	
	援助分類	具体的な援助
Ⅰ興味や関心の芽生え	◎見守る	・　Ｊ児の興味や関心の対象を捉える。
Ⅱ興味や関心の持続	◎認める ◎受け止める ◇引き出す ☆提示する	・　自分から作ろうとする姿を認める。 ・　まねて作りたい、自分もやりたいなどのＪ児の思いを受け止める。 ・　作りたいものをより具体的にイメージできるように、思いや考えを引き出す。 ・　保育者が実際に、用具や材料の扱い方を示す。
Ⅲ興味や関心の高まり	◎認める ◇確認する ☆提示する	・　Ｊ児の気付き、思い付きなどを言葉で表して認める。 ・　幼児のしていることや実現したいことを確認する。 ・　イメージに合うものを提案する。

予想されるＪ児の姿	スカートや抱っこ紐を身に着けて、なりきって動き、遊びの場を作ったり友達の場に入って遊んだりする。	
興味や関心に基づく主体的な遊びの過程<図１より>	幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助<表２より>	
	援助分類	具体的な援助
Ⅱ興味や関心の持続	◎認める ◇引き出す ☆提示する ☆手助けする	・　自分からスカートや抱っこ紐を身に着け、遊び始める姿を認める。 ・　イメージがより具体的になるように、幼児の思いや考えを引き出す。 ・　遊びが展開するきっかけとなるような動きやものを見せる。 ・　幼児のペースに合わせて必要な手助けし、遊びの楽しさを感じることができるようにする。
Ⅲ興味や関心の高まり	◎認める ◇確認する ☆提示する ☆手助けする	・　Ｊ児が楽しんでいることや自分で思い付いて取り組んでいることなどを言葉で表して認める。 ・　Ｊ児が遊びの状況を意識することができるように、Ｊ児がしていることや、一緒に遊んでいる友達の様子などを言葉で表す。 ・　今までの遊びの中で経験したことで、今取り組んでいる遊びに取り入れることができそうな事柄を思い出せるような言葉を掛ける。 ・　今している遊びがより楽しくなるように、必要なことを一緒に考えて取り組んだり、Ｊ児（たち）だけでは実現が難しいときには手伝ったりする。

(5)　検証保育当日の記録、分析及び考察

＜記録前の様子＞

午前中、Ｊ児はＫ児と一緒に家ごっこをして遊ぶ。場を作る際に、保育者が用意した段ボールを開いたつい立てを使って遊んだ。二人は“かわいい家にしたい”という思いをもっており、つい立てに飾りを付けることを思い付くが、片付けの時間になったため、実現していない。

＜環境の構成＞

昼食後も遊びの続きができるように、Ｊ児とＫ児が使ったつい立てをすぐに見える場所に置いておく。また、装飾を付けたいという思いから遊びが広がるように、ハートの形の枠線を書いた色画用紙を多めに用意する。

＜記録、分析及び考察＞

分析①	記　録 （保育者の援助（表２を参照した援助））	分析②
興味や関心に基づく 主体的な遊びの過程 ＜図１より＞		○興味や関心 遊びの持続・変容に関わる要因＜表１より＞
Ⅰ興味や関心の芽生え	Ｊ児は、製作コーナーにあるハートの形が書かれた色画用紙を手に取る。保育者は、「ハートの形があるのによく気付いたね。」と言う（◎認める）と、Ｊ児はうなずき、ハートの形に色画用紙を切り抜く。	環境にあるもの ○ハートの画用紙を切ること。
Ⅱ興味や関心の持続	Ｊ児は、ピンク、黄緑、白など様々な色画用紙を選び、ハートの形に切っていく。 そばで、同じように色画用紙をハートの形に切っているＫ児に「これでいいかな。」と色を確認する。Ｋ児はうなずく。二人でたくさんのハートを切る。たくさんのハートができたことを保育者も一緒に喜ぶ（◎受け止める）。 園庭から「ヨーイ、ドン。」という声が聞こえる。すると、Ｊ児は、園庭の友達の様子を見る。そして、Ｋ児に「私、ヨーイドンするから、終わったら呼んで。」と言い、カラー帽子をかぶって園庭に出ようとしてテラスに行く。 園庭に出ようと靴を履き替えているＪ児に、保育者は、「あれ。ハートはどんな風になったのかな。貼ってから行こうよ。」と声を掛ける（◇確認する）。Ｊ児は靴を履き替えるのをやめてＫ児のいる製作コーナーに戻る。	身近な人の言動 （Ｋ児の言動） ○Ｋ児と同じようにハートの形を切ること。 満足感 身近な人の言動 ○園庭でかけっこをすること。 身近な人の言動 （保育者の援助） ○Ｋ児と一緒に遊ぶこと。
Ⅲ興味や関心の高まり	保育者は、室内に置いてあった段ボールのつい立てを二人がハートの形を切っていた製作コーナーに持ってくる（☆提示する）。Ｊ児は、セロハンテープを丸めて、ハートの形の裏側に付け、段ボールのつい立てに貼り付ける。Ｋ児と二人で、全てのハートの形を貼り終える。	環境にあるもの （保育者の援助） ○ハートに切った画用紙をつい立てに貼ること。

＜当日の保育からの考察＞

・　Ｊ児は、保育者や友達の言動、環境にあるものなどに敏感に反応している。別の場で遊ぶ幼児の声に反応して、今取り組んでいた遊びをやめようとする場面もあった（Ⅱ）。Ｊ児が取り組み始めた遊びを十分に楽しむためには、他の遊びや他児の言動などの影響を考慮し、環境構成に配慮したり、今取り組んでいる遊びへの意識が高まるような働き掛けを意図的に増やしたりすることが必要だと考えられる。

・　ハートの形をたくさん切ったことで満足感を味わったこともあり、園庭での遊びに興味や関心が向いたと考えられる（Ⅱ）。本時のねらいの１項目に基づき、保育者は◇確認するという援助を行った。このことにより、今までしていた遊びに興味や関心が戻っている。一つの遊びの持続時間が短いという課題があるＪ児には、このような援助が必要な場面が多くあるのではないかと考えられる。

＜翌日の援助の方向性＞

・　Ｊ児が自分のしたいことに集中して取り組めるように、他児の影響を受けにくいような環境（Ｊ児が遊ぶ場所の配置、他の遊びとの距離など）を整える。

・　Ｊ児の遊びへの思いがより具体的になるように、一緒に遊ぶ幼児の言動を知らせたり保育者がＪ児の思いに寄り添い一緒に遊んだりする。

(6)　翌日の保育の記録、分析及び考察

分析①	記　録 （保育者の援助（表２を参照した援助））	分析②
興味や関心に基づく 主体的な遊びの過程 ＜図１より＞		○興味や関心 遊びの持続・変容に関わる要因＜表１より＞
Ⅰ興味や関心の芽生え	身支度を済ませたＪ児に、保育者が「昨日、素敵なハートの壁ができたね。素敵なお家ができそうだね。」と声を掛ける（◇引き出す）。Ｊ児はうなずき「Ｋちゃんと遊ぶの。」と言う。Ｊ児はＫ児を誘い、二人は中型積み木を運んで家を作り始める。	環境にあるもの （保育者の援助） 身近な人の言動 ○Ｋ児と場を作ること。
Ⅱ興味や関心の持続	Ｊ児とＫ児は、二人で中型積み木を運ぶ。中型積み木を壁のようにして囲い、家が出来上がる。	満足感
Ⅲ興味や関心の高まり	Ｋ児がぬいぐるみを持ってくる。「赤ちゃん、病気なの。」と言ってぬいぐるみを抱くと、Ｊ児も同じようにぬいぐるみを持ってきて抱く。 Ｋ児は、保育者に「熱を測るものを作りたい。」と言う。保育者は、Ｊ児にも聞こえるように「いいね。材料を探してみようか。」とＫ児に言う（☆提示する）。Ｊ児はそのやり取りを見聞きしている。Ｋ児と保育者が製作コーナーに行くと、Ｊ児も一緒に製作コーナーに行く。 Ｋ児が保育者と一緒に色画用紙を使って体温計を作る様子を見ていたＪ児は、「私も作りたい。」と言う。保育者は「うん。作ってみよう。」と言う（◎認める）。Ｊ児は、自分で材料を探して作り始める。	身近な人の言動 （Ｋ児の言動） ○Ｋ児と同じように遊ぶこと。 身近な人の言動 （Ｋ児と保育者の言動） ○Ｋ児と同じように体温計などを作ること。
Ⅳ興味や関心の更なる持続	時折作業を止めてはＫ児や保育者の作ったものを見て、再び作り始める。体温計が出来上がる。その後、Ｋ児に教えてもらったり保育者の手助け（☆手助けする）を受けたりしながら、注射器や聴診器も作る。	満足感
Ⅴ興味や関心の更なる高まり	Ｊ児は体温計、注射器、聴診器を作り終えると、自分たちの作った遊び場に戻る。 Ｊ児とＫ児は、それぞれにぬいぐるみを寝かせて、作ったものを使いながら、体温を測る動きや注射する動きをして、看病をするイメージで遊び始める。	○作ったものを使って看病のイメージで遊ぶこと。

＜当日の保育からの考察＞

・　前日の様子から、Ｊ児は場やものができると満足感をもち、別の遊びに興味や関心が向きやすい傾向があることが分かった。そこで、場が完成した後、意図的に同じ場で遊んでいたＫ児の取組を知らせた（☆提示する）。このことをきっかけに、Ｊ児は遊びに使うもの作りへの意欲をもち、その後の遊びに主体的に取り組んだ。

(7)　総合考察

検証保育初日に、図１と表１を基にＪ児の姿を分析、考察したことで、Ｊ児の遊びの傾向が分かり、援助が必要なタイミングを把握することができた。このことにより、保育者の援助の方向性が明確になり、翌日Ｊ児が自分の思いや考えをもって主体的に遊ぶ姿につながった。

図１や表１を参照しながら幼児の姿を分析、考察し、その幼児の傾向を把握することで、援助が必要なタイミングやより適切な援助が明確になっていくと考えられる。

３　２か月間の保育者の援助の積み重ねによる対象児の変容を捉える検証保育（Ｌ児事例）

２年保育４歳児　９月上旬～10 月下旬

(1)　Ｌ児の実態

・　そばにいる友達と同じように動いたり、触れ合ったりすることを喜んでいる。
・　友達が遊んでいる場に後から入って遊ぶことが多い。また、友達に誘われると、自分の思いと合わない場合でも断ることができない様子も見られる。
・　初めて取り組むことは、「先生、一緒にやろう。」「手伝って。」と保育者に頼ることが多い。保育者には安心して自分の思いを表している。

(2)　保育者の願いと図１を踏まえた援助の方向性

＜保育者の願い＞
・　自分のしたいことに、自分から関わり、安心して伸び伸びと遊んでほしい。
・　友達をまねたり、仲間に加わったりして遊ぶ中で、Ｌ児の思いや考えを表して遊んでほしい。

＜図１を踏まえた援助の方向性＞
・　したい遊びに自分から関わるために、遊び出しの場面での援助が重要である。特に Ⅰ、Ⅱの過程の姿を具体的に想像し、援助を考えておく。
・　Ⅲの過程では、Ｌ児が自分なりの思いや考えを意識できるような働き掛けを意図的に多くもつ。

(3)　本時のねらい

○　自分のしたい遊びの中で、友達との関わりを楽しむ。
○　自分の思いや考えをもち､安心して自分から関わったり考えたことを試したりして遊ぶ。

(4)　指導案（抜粋）

予想されるＬ児の姿	保育者や友達がしている遊びを見て、まねをしたり一緒に遊んだりする。

興味や関心に基づく主体的な遊びの過程＜図１より＞	幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助＜表２より＞	
	援助分類	具体的な援助
Ⅰ興味や関心の芽生え	◎見守る ◎認める	・　Ｌ児の興味や関心の対象を捉える。特に、Ｌ児が初めて取り組む遊びに興味や関心をもっている様子のときは、その後の援助の方向性を見極める。 ・　安心してその後の遊びに取り組むことができるように、言葉を掛けたり視線を送ったりする。
Ⅱ興味や関心の持続	◎認める ◎受け止める ◇確認する	・　安心して遊びに取り組むことができるように、自分から取り組む姿を価値付け、認める。 ・　Ｌ児の言動を、表情や言葉で肯定的に受け止める。 ・　思いや考えが具体的なものとなるように、Ｌ児とやり取りする中で、思いや考えを聞いたり言葉に表したりして確認したりする。
Ⅲ興味や関心の高まり	◎認める ◇確認する ☆手助けする	・　Ｌ児が楽しんでいる姿や頑張っている姿などを、言葉に表して認める。 ・　周りで遊ぶ友達の様子を知らせたり、Ｌ児の思いや考えを予想して言葉で表したりして、Ｌ児が遊びの状況を意識できるようにする。 ・　Ｌ児の思いや考えを受け止め、Ｌ児が自分の思いや考えを表すことができるように、代弁したり、仲立ちをしたりする。

予想されるＬ児の姿	自分のしたい遊びを見付けて取り組み出すものの、他児の言動に影響を受けて、違う遊びを始める。

興味や関心に基づく主体的な遊びの過程＜図１より＞	幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助＜表２より＞	
	援助分類	具体的な援助
Ⅱ興味や関心の持続	◎見守る ◇確認する ☆提示する	・　離れていても視線を送り、Ｌ児が見守られているという安心感をもてるようにする。 ・　遊んでいた仲間や使っていたものなどを確認する。 ・　遊びが展開するきっかけになるようなものを提示したり、モデルとなって動いたりする。
Ⅲ興味や関心の高まり	◇確認する ☆提示する ☆手助けする	・　遊びの展開に動きがでるように、役割や状況を確認する。 ・　今している遊びに必要な場やものを示したり、遊びがより楽しくなるヒントを示したりする。 ・　Ｌ児が困っていること、不安に思っていることなどを受け止め、保育者も遊びの仲間の一員として一緒に考えたり、手伝ったりする。

(5)　９月上旬の記録、分析及び考察

分析①	記　録 （保育者の援助（表２を参照した援助））	分析②
興味や関心に基づく主体的な遊びの過程 ＜図１より＞		○興味や関心 遊びの持続・変容に関わる要因＜表１より＞
Ⅰ興味や関心の芽生え	Ｌ児は園庭でかけっこの審判役をしているが、一本橋で遊んでいる幼児たちの動きが気になる様子で、一本橋の方をうかがうように見ている。	印象的な体験 （今までに一本橋で遊んだ経験） 身近な人の言動 ○一本橋で遊ぶこと。
Ⅱ興味や関心の持続	かけっこをする幼児がいなくなり、Ｌ児は一本橋に移動し、「入れて。」と仲間に加わる。 一本橋を渡る中で、友達のまねをして、一本橋から落ちてみせたり、橋を渡りきって「イエス。１００ポイント。」と言ったりして遊ぶ。 Ｍ児がやってきて、「Ｌくん、（かけっこの）審判やって。」と言う。Ｌ児は、「いや。」と返事をするが、重たい足取りでかけっこの場に行き、視線を下に向けながら、「位置に付いてヨーイ、ドン。」と言う。 その後はすぐにしゃがみ、砂を触ったり、かけっこをする友達に砂を投げたりする。 保育者はＬ児のそばに行き、「一本橋やっていたね。」「できるようになったかな。」（◇確認する）と話しかける。Ｌ児「こけたりする。」と笑顔で答える。 保育者とＬ児は一緒に一本橋の場に行く（☆手助けする）。保育者も渡って見せる（☆提示する）。 Ｌ児も一本橋を渡る。保育者は「Ｌ君、青の所（一本橋の途中の目印）まで行ったじゃない。」「次はどこまで行けるようになるかな。」と話す（◎認める）と、Ｌ児は嬉しそうに笑う。	身近な人の言動 ○一本橋を友達と同じように渡ること。 身近な人の言動 （Ｍ児の言動） 困り感 身近な人の言動 （保育者の援助） ○保育者と一緒に一本橋を渡ること。 身近な人の言動 （保育者の援助）
Ⅲ興味や関心の高まり	また一本橋のスタート地点に戻り、挑戦する。最後まで渡り切り、「ゴール。」と言って喜ぶ。	○一本橋を最後まで落ちずに渡ること。

＜本日の保育からの考察＞

・　Ｌ児は一本橋で遊びたいという思いをもっているものの、かけっこの審判をやめることができず、すぐには関わっていない（Ⅰ）。また、一本橋で遊んでいる途中でＭ児に「審判をやって。」と頼まれたときも、一本橋で遊びたいという思いがあるものの、断り切れずにいる（Ⅱ）。Ｌ児が安心して自分の思いを表すことや積極的に自分の意思を表すことなどができるように、他児との関わりを仲立ちしていく必要がある。

・　Ｌ児は、保育者との関係の中では、自分の思いを伸び伸びと表している様子が見られる（Ⅱ）。保育者は、Ｌ児と関わる時間を意図的に多くもつようにしながら、Ｌ児が安心して自己表現できるようにするとともに、そばにいる友達とＬ児の仲立ちをする役割をしていくことが重要である。

・　保育者がＬ児の思いを◇確認し、モデルとなる動きを☆提示する援助をしたことで、Ｌ児は一本橋で遊ぶ面白さを感じ始めている。このように、Ｌ児が興味や関心をもったことをきっかけとして、遊びの面白さや楽しさを味わい、経験を広げていくことが、自信をもって自分のしたい遊びに取り組む基盤につながると考える。

＜Ｌ児の今後の援助の方向性に関する考察＞

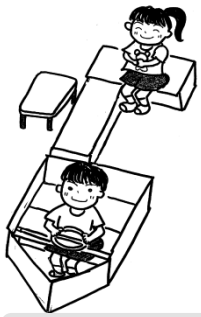
・　表１を参考に、Ｌ児の興味や関心を的確に捉える。特に、表１－(1)幼児の内面的な要因や表１－(3)今までの体験とのつながりを視点とし､現象として表れている言動にとらわれずに、Ｌ児の内面を捉えることを意識的に行う。その上で、Ｌ児の思いが実現できるように支える。

・　友達との関わりでは支えが必要な場面も多いので、保育者が仲立ちをする中で、徐々にＬ児が自分の思いや考えを友達に表して伝えることができるようにしていく。

・　Ｌ児が自分からしたい遊びに取り組んでいく姿に対しては、◎認める、実現が困難なときは☆手助けするなどの援助を通して、満足感や充実感を味わえるようにする。

Ｌ児に対して、初回の検証保育を行った９月上旬以降、上に記したような援助を積み重ねてきた。その後 10 月下旬に再度検証保育を行い、Ｌ児の変容を分析、考察した。

(6)　10 月下旬の記録、分析及び考察

分析① 興味や関心に基づく主体的な遊びの過程 ＜図１より＞	記　録 （保育者の援助（表２を参照した援助）））	分析② ○興味や関心 遊びの持続・変容に関わる要因＜表１より＞
Ⅰ興味や関心の芽生え	登園後、身支度を終えたＬ児は、Ｎ児が段ボールで作った船に入って座っている様子を見て、Ｎ児に笑いかけながらその船の中にそっと入る。Ｎ児も笑顔で応える。 Ｎ児が立ち上がり、船を動かし始めるとＬ児も立ち上がり、一緒に動く。 保育室内を一周したところで船を止めて段ボールから出て、中型積み木を運び始める。	身近な人の言動（Ｎ児の動き） 環境にあるもの ○Ｎ児と段ボールの船で遊ぶこと。
Ⅱ興味や関心の持続	Ｎ児は「Ｌくん、作ろう。」と声を掛け、二人で船の後方に中型積み木を並べる。 途中、ほしい形の中型積み木が見付からず、Ｎ児が保育者に相談をする。保育者は、Ｎ児とＬ児の二人に、どんな場を作りたいのかを聞き（◇引き出す）、中型積み木を一緒に選ぶ（☆提示する）。 船の後方に、中型積み木を敷き詰めた一畳ほどの広さの場所ができる。	身近な人の言動（Ｎ児の動き） ○Ｎ児と一緒に中型積み木を使って遊び場を作ること。 身近な人の言動（保育者の援助） 満足感
Ⅲ興味や関心の高まり	Ｎ児はままごとコーナーからぬいぐるみを持ってきて、赤ちゃんを抱くようなしぐさをしながら中型積み木の場に座る。Ｌ児は、段ボールの船の中に入り、運転するような動きをする。	○船に乗るイメージで遊ぶこと。
Ⅳ興味や関心の更なる持続－(1)	Ｏ児が広告紙を丸めて作った剣を持ち、船のそばに来て、Ｌ児に向かって「かっこいい武器、作った。」と剣を見せながら言う。Ｌ児は「こっちには来ないでよ。真ん中島で戦って。」とＯ児に言う。 Ｏ児が「真ん中島ってどこ。」と言うと、保育室中央を指して「先生がいる所。」と言う。保育者は、ヤシの木の製作物（運動会の装飾で作ったもので 1.5 メートルくらいの高さがあるもの）を２本持ってきて、保育室の中央に置く（☆提示する）。Ｏ児たちはそこで遊び始める。Ｌ児は、また船を運転するような動きを始める。	 身近な人の言動（保育者の援助）

	Ｎ児がままごとコーナーから小さいテーブルを運ぶ。保育者はテーブルを運ぶのを手伝いながら、Ｌ児にも聞こえるように「ここで何をするのかな。」と言う（◇気付かせる）。Ｌ児はテーブルの方を見る。	身近な人の言動 （Ｎ児の言動） （保育者の言動）
Ⅴ興味や関心の更なる高まり	Ｎ児は「食べ物とか、持ってこようよ。」とＬ児に言う。Ｌ児は「いいよ。」と言い、二人はままごとコーナーと船の場を何度か行き来して、鍋やフライパンを持ってくる。Ｌ児「食料もいるんだった。」と、言いながら麺に見立てる毛糸を持ってくる。	○船上で生活しているイメージで遊ぶこと。
Ⅳ興味や関心の更なる持続－(2)	二人で、テーブルをキッチンに見立てて料理するまねをしたり、食べる動きをしたりして遊ぶ。	

＜本日の保育の姿からの考察＞

- ９月上旬は、他児の影響を受けて自分のしたい遊びに集中できない様子が見られたＬ児だが、この日は、一貫して“Ｎ児と一緒に船のイメージで遊ぶ”という思いをもち遊びに取り組んでいた。自分の意思をより強くもち、遊びに向かうようになってきている。
- Ｏ児が広告紙で作った剣を見せにＬ児たちの船の場にきた場面（Ⅳ－(1)）では、Ｌ児はＮ児と二人で遊びたいという思いがあり、Ｏ児に「こっちには来ないでよ。」という言葉で自分の思いを伝えている。９月上旬は自分の思いを友達に伝えることができずにいる場面もあったことを考えると、大きな成長である。
- Ｎ児との関わりの中では、Ｎ児の言動を受けて遊ぶことが多い。今後は、“友達と一緒に遊びたい”という思いを土台にしつつ、Ｌ児自身がその遊びに対する思いや考えを広げ、遊びを展開していくような経験を積み重ねていけるとよい。

(7)　総合考察

９月上旬の検証保育では、表１や図１に当てはめてＬ児の姿を分析、考察したことにより、自己の思いを友達に対して表出することに消極的な面があるという課題が見られた。この課題について、約２か月が経過した 10 月下旬の事例では、＜本日の保育の姿からの考察＞に示したように、変容が見られた。９月上旬の検証保育後に考察をした今後の援助の方向性の２項目にある「保育者が仲立ちをする中で、徐々にＬ児が自分の思いや考えを友達に表して伝えることができるようにしていく」という援助の積み重ねによる変容と捉えることができる。

９月上旬の検証保育では、Ｌ児の視線や行動を丁寧に捉えた結果、かけっこの審判をしているときも“一本橋で遊ぶこと”への興味や関心をもっていることが捉えられた。この事例から、表面上に表れる姿だけでなく、幼児の内面の思いを考慮しながら実態を捉えることが大切であることが分かった。そこで、保育者は、表１を視点としてＬ児が遊ぶ姿を観察し、Ｌ児の興味や関心を的確に捉えるように意識をした。このことにより、幼児の思いに沿った援助を積み重ねることができたと考える。

10 月下旬の検証保育におけるＬ児の姿からは、成長が見られると同時に、新たな課題も見いだされた。このように、同じ視点（表１、図１）から幼児の姿を見ることで、その成長や課題を明確に捉えることができるということも検証保育の中で実証された。

Ⅷ　事例（５歳児）

表１、図１、表２を踏まえた５歳児の実践事例を報告する。

１　事例について

本事例は、表１の視点をもとに幼児の興味や関心を捉え、遊びの展開を図１に当てはめながら実態の把握に努め、表２を考慮して援助を行った記録をまとめたものである。

２　Ｐ児事例　『転がしゲーム』　　３年保育５歳児９月中旬

(1)　Ｐ児について

- 製作をすることへの興味や関心が高く、いろいろな材料を使い、組み合わせたり工夫したりして遊ぶことを楽しんでいる。
- 思い通りにいかなかったり、どのようにするとよいのかが分からなくなったりすると、すぐに諦めてしまうことがある。

(2)　ねらい

○　自分のめあてをもち、その実現に向かって試したり工夫したりして遊び、最後までやり遂げる満足感を味わう。

(3)　記録、分析及び考察

分析① 興味や関心に基づく主体的な遊びの過程 ＜図１より＞	記　録 （保育者の援助（表２を参照した援助）））	分析② ○興味や関心 遊びの持続・変容に関わる要因＜表１より＞
Ⅰ興味や関心の芽生え	Ｐ児が「転がしゲームを作ろうっと。」と言って保育室の製作コーナーに行き、材料置き場からトイレットペーパーとその芯を取り出す。保育者は、Ｐ児の興味や関心を捉えながら見守る（◎見守る）。	印象的な体験 環境にあるもの（使い慣れた材料） ○自分で材料を選び、転がしゲームを作ること。
Ⅱ興味や関心の持続	Ｐ児はトイレットペーパーを丸めて球を作り、芯の中に転がす。球が芯から転がり出てくるのを見ると、「よしっ。」とつぶやく。保育者は「転がったね。」とＰ児に言う（◎受け止める）。	身近な人の言動（保育者の援助） 満足感
Ⅲ興味や関心の高まり	Ｐ児は材料置き場からトイレットペーパー芯をもう１本持ってきて、「トンネルをもっと長くしてみよう。」と言う。２本の芯をセロハンテープで貼り合わせる。球が２本の芯から転がり出てくるのを見ると、嬉しそうな表情を浮かべ、何度も繰り返す。保育者は「何回やっても転がるね。」とＰ児に言う（◎認める）。	○芯をつなげて長くして転がすこと。 身近な人の言動（保育者の援助） 満足感
Ⅳ興味や関心の更なる持続－(1)	Ｐ児は材料置き場からトイレットペーパー芯を何本かまとめて持ってきて、それをセロハンテープで貼り合わせて長くつなげる。	○球をもっと長い距離で転がすこと。 困り感

	トイレットペーパー芯をセロハンテープで何本かつなげた筒状のものの中に、球を転がしてみると、途中で引っ掛かり、止まってしまう。Ｐ児は不思議そうに芯の中をのぞくが、よく見えずに困ったような表情を浮かべ、トンネルを振って球を取り出す。保育者は「どこで引っ掛かったんだろうね。見えたら分かるかもしれないね。」とＰ児に言う（☆提示する）。	身近な人の言動（保育者の援助）
Ⅴ興味や関心の更なる高まり－(1)	Ｐ児は芯からセロハンテープを剥がして一つずつに分解し、芯を縦半分に切り落として、とい状にする。その後、再びセロハンテープでつなげ直して転がしゲームのコースを再構成する。	必要感 ○球が引っ掛かる場所を確かめること。
Ⅳ興味や関心の更なる持続－(2)	縦半分に切り落としたトイレットペーパーの芯で作った転がしゲームのコースに球を転がしてみると、途中で引っ掛かる場所が見えるようになる。	満足感
Ⅴ興味や関心の更なる高まり－(2)	Ｐ児は球を何度も転がしながら、球が止まる場所の芯の幅を広げたり、球の大きさを変えたりして、作ったものを直していく。	○球が最後まで転がるようにすること。
Ⅵ充実感や満足感	そして、球が最後まで転がるようになる。保育者は「球が最後まで転がったね。とうとう完成したんだね。」とＰ児に言う（◎認める）。 Ｐ児は満足そうな表情を浮かべる。	身近な人の言動（保育者の援助） 満足感

＜考察＞

- Ｐ児が自分の思いや考えを実現していく満足感を積み重ねる中で、表２のⅡにある◎受け止める、Ⅲや Ⅴにある◎認めるなどの援助を意図的に行った。これらの援助が、Ｐ児が諦めずに、自分の力で転がしゲームを完成させることにつながったと考えられる。
- Ｐ児の困り感に合わせて、援助表のⅣにある☆提示する、◇気付かせるなどの援助を行った。保育者が状況を言葉で表すことにより、Ｐ児が遊びの現在の状況を受け止めている。そして、現状を受け止めることから必要感が生まれ、Ｐ児が更に自分の思いや考えをもって遊びを主体的に展開していったと考えられる。
- 今後は、友達との関わりの中で、Ｐ児がいろいろな思いや考えに触れ、興味や関心に基づく主体的な遊びの展開を更に促していくことが必要であると考える。

(4)　事例のまとめ

保育者として幼児の遊びに関わっていくときに、どこまで手助けをするべきか悩むことが多くある。幼児が自分の力で解決できるように手助けや助言を控えて見守っていたところ、幼児の力では解決ができずに遊びが続かなくなってしまうということもあれば、保育者が積極的に助言をすることにより幼児が自分で考えて取り組む機会を奪ってしまうということもある。

このような悩みを抱えながら保育をしているが、本研究の表１や図１を視点として幼児が遊ぶ姿を捉えることにより、手助けや助言などの援助を多くすべき場面と、見守ったり認めたりすることが大切な場面とを意識的に捉えられるようになっていくと考えられる。

Ⅸ　研究の成果

１　幼児の興味や関心を捉えることの重要性について

○　表１「遊びの持続・変容に関わる要因」を視点として複数の事例を検討する中で、幼児によって、影響を受けやすい要因が異なることが分かった。一人一人の幼児の傾向をつかむことで、より適切な援助をイメージすることができることも分かった。

○　集団やグループで遊んでいても、その中の幼児一人一人の興味や関心は異なっている。集団を捉える視点をもちつつ、一人一人に焦点を当てて、その幼児の興味や関心も捉えることが大切である。

○　“積み木”“ままごと”など、興味や関心をもった対象そのものを捉えるだけでは援助の方向性が見いだせない。興味や関心をもった対象に幼児がどのように関わっているかを捉えることは、幼児の内面の心の動きを推測することでもあり、幼児の興味や関心を的確に捉えることにつながる。

２　興味や関心に基づく主体的な遊びの過程について

○　図１「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」により、遊びの展開を可視化することを試みた。図１に当てはめて、目の前で展開されている幼児の遊びを分析することで、遊びの実態をより具体的に把握することができ、適切な援助の方向性やタイミングを見いだすことにつながった。

３　自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助について

○　目指す幼児像である「遊びをより楽しくしたいという自分の思いや考えをもち、自己表現しながら主体的に遊ぶ幼児」を想定し、図１に当てはめて、援助を整理した。こうしてまとめた表２「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」の中の多くの過程で、認める、手助けするという援助が挙げられた。認めたり手助けをしたりする際の具体的な手だては、その時の遊びや幼児の実態、保育のねらいによって異なってくる。主体的な遊びを保障するためには、保育者が受容的な姿勢で、温かく幼児を支えることが欠かせないということが分かった。

Ⅹ　今後の課題

○　本研究は、４歳児、５歳児の事例を通して行ったため、３歳児の「遊びの持続・変容に関わる要因」や「興味や関心に基づく主体的な遊びの過程」、「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」についても、今後検討していく必要がある。

○　表２「幼児が自分の思いや考えをもち主体的に遊ぶための援助」が汎用性のあるものとなるように、様々な遊びの場面で検証していく必要がある。今後も実践と検討を重ねる中で、精度を高め、より活用しやすいものになるように、改善を図ることが課題である。

平成30年度　教育研究員名簿

幼稚園

学　校　名	職　名	氏　名
千代田区立お茶の水幼稚園	教　諭	遠藤敬子
中央区立晴海幼稚園	主任教諭	◎田代綾子
港区立港南幼稚園	教　諭	及川和秀
品川区立伊藤幼稚園	主任教諭	榊　有加
杉並区立堀ノ内子供園	教　諭	三好友世

◎　世話人

〔担当〕東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
指導主事　大川　美紀子

平成 30 年度

教育研究員研究報告書
幼稚園

東京都教育委員会印刷物登録

平 成 30 年 度 第 135 号

平成 31 年３月発行

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０―６８４９
印刷会社　康印刷株式会社

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。